

花はなにたい対してきゆう旧をおも懐う（釈義堂）  
（しゃくぎどう）

紛ぶん紛ぶんたる 世せい事じ 乱みだれて 麻あさの 如ごとし

旧きゆう恨こん 新しん愁しゆう 只ただ 自みずから 嗟なげく

春しゆん夢む 醒さめ 来きたつて 人ひと 見みえず

暮ぼ檐えん 雨あめは 洒そぐ 紫し荊けいの 花はな

紛紛世事亂如麻 舊恨新愁只自嗟  
春夢醒來人不見 暮檐雨洒紫荊花

解説 春の夕ぐれに夢からさめて、軒ばの雨が注ぐ紫荊の花を見ながら、今はなき旧友たちの悲しい思い出にふけっている作。

語釈 ※懐旧Ⅱむかしのことを思う。 ※紛紛Ⅱ乱れるさま。

※乱麻Ⅱ世の中の状態などがひどく乱れているさま。 ※世事Ⅱ世間のこと。 ※旧恨新愁Ⅱ以前に。 また近ごろ亡くなった知人に対する恨みや愁い。 ※人Ⅱ夢に見た旧恨新愁の人たち。 ※檐Ⅱひさし。 のき。 ※紫荊花Ⅱ花蘇芳はなすおう。 熱帯アジア原産の豆科の小高木、また低木。

通釈 世の中のことは実にわずらわしく、乱れた麻の糸のようである。 その間に知人、友人を失い、昔のことを恨み、近ごろのことを愁い、ただ嘆くばかりである。 春のうたた寝の夢から覚めてみれば、夢に見たそれらの人たちの姿はなく、夕暮れの軒ばの雨が、さびしく紫荊の花にしたたっているばかりである。